

化学

大学教員

楽しく生き生きと生きる

三浦佳子 (九州大学大学院工学研究院化学工学部門 教授)

仕事の内容とやりがい

仕事は、バイオに役に立つような高分子材料を創り出すことがテーマで、特に糖を用いた材料開発を行っています。化学の機能を学生に教授することも重要な仕事です。自分の研究が産業のシーズになったり、新しいコンセプトを打ち出せたりといったことにはやりがいを感じます。また、時間のやりくりや生活スタイルなど、自分の職業生活を自由にデザインできることもよいことであると思います。

仕事と生活のバランス

子供がいないので、かなり仕事中心の生活になっていると思います。家の仕事については家政婦の方をお願いし、最新機器の活用を図るなどして軽減しています。家政婦の方には家の仕事のダメぶりに呆れられているような気がしますが、色々な人々に助けられていることを実感します。完璧を求めずに、商業サービスを利用することで、使える時間も増えるかと思えます。

進路決定のきっかけ

進路決定のきっかけのようなものは、ありませんが、子供のころ(4-5歳)に科学者になることに決めてそのまま歩んできました。私の家は理系一家であり、理系に進むことや、化学系に進むことは自然でした。ただ、小学生の時代には女性が働くような社会情勢ではなかったので、子供ながら真剣に悩んだこともあります。中学校から進学校に進んだので、キャリア系の仕事を選択することは割と自然な雰囲気であったような気がします。大学に進学したら、男性だらけだったのはちょっとショックでした。

進路選択に対するメッセージ

理系文系の選択に限らず、進学就職といった人生設計、進路選択についてはあらゆる可能性と自分の希望を考慮した上で決定してほしいと思います。若いうちの進路選択は、あらゆることが不明瞭に感じられるかもしれませんが、人の意見ではなく、自分の意見で決定してほしいと思います。その際、職業の内容だけでなく、収入、福利厚生、経済状況予測、雇用形態、家庭の在り方などできるだけよく考え、自分の望む人生の在り方を知ってほしいと思います。

海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

博士課程修了後に、アメリカに博士研究員として勤務しました。海外の経験では、日本で学んだサイエンスも十分に通用することを実感すると同時に、科学技術が世界の共通語であることを実感しました。ドクターさえ取れば世界中どこでも働けるので、得やすく有用な国際資格だと思います。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

大学にいる女性研究者は日本が少ないことは確かですが、留学先(米国)でも決して多いわけではないと感じました。女性博士の多くは企業に就職しているようでした。女性研究者は大学、研究者といったアカデミックジョブのみならず、企業も含めて考えるものであるため、女性研究者の育成の必要があるならば、社会環境の整備が不可欠であると考えます。サイエンティフィックに学生の興味を煽るだけで、女性研究者が増えることはないでしょう。どういう社会を作り上げていくかを、我が国でも世界的に考えていくことが学生の進路に強く関係しています。

海外留学・勤務を決めたきっかけについて

日本の景気が悪くなって来た時期に博士号を取得しましたので、当時仕事や研究資金の豊富であった米国で研鑽を積み、充実した人生の一時期を得ることを目的として渡米を決意しました。フェローシップは恥ずかしながらあまり得ようという努力をすることがなく、相手先の教授の研究資金をあてにする形で自分を売り込んでいきました。今考えると、もう少しスマートなやり方もあったようには感じます。

滞在先の思い出・生活者としての体験

朝から晩まで働いていたことが思い出です。欧米では一流研究者は非常に働いていることを留学して初めて知りました。また、初めて給料をもらったのが留学先の大学であったため、とても嬉しかった思い出があります。大学に在学しているころに比べて非常に研究に専念していたので、学生当時の指導教授に申し訳ないような気すらするほどでした。

<三浦佳子(みうらよしこ)プロフィール>

平成7年京都大学工学部卒業、平成12年3月京都大学大学院博士課程修了、平成12年4月米国ペンシルバニア大学博士研究員、平成13年名古屋大学助手、平成17年 北陸先端科学技術大学院 助教授(その後准教授)、平成22年 九州大学大学院 教授